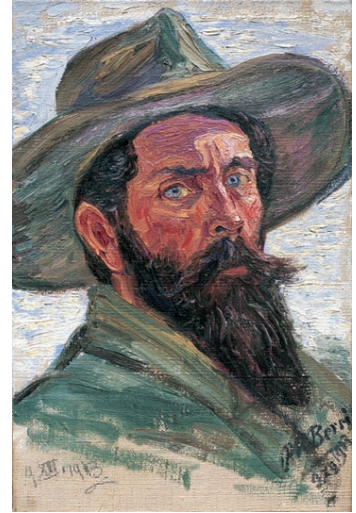


サンモリッツの中心、築百年の邸宅ヴィラ・アローナにあるベリー美術館は、保養処方医で画家のペーター・ローベルト・ベリー(1864-1942)に捧げられた美術館です。四十年以上の間に産み出された、油彩、パステル、素描作品の大部分は親族の所蔵品です。この内容豊かなコレクションの公開に、そしてペーター・ローベルト・ベリーの創作活動をより深く見て取ることに、ベリー美術館は成功しました。ベリーはこの峡谷の名を広く知らしめる芸術家たち、ジョヴァンニ・セガンティーニやジョヴァンニ・ジャコメッティに、感銘を、また影響を受け、パリとミュンヘンの芸術学校に学びました。

故郷に帰った彼は、輝く色彩に彩られた、南の空の下に広がる山の世界の美を描きとどめました。サンモリッツとオーバー・エンガディーン（上エンガディーン）は彼の活動を決定した場所とも言えます。この場所で、暮らしと作品、そして景観が交差し、19世紀末から20世紀初頭という時代の比類のない記録が形作られました。



帽子をかぶった自画像、1913年
キャンバスに油彩 (27×41センチ)



ヴィラ・アローナ、サンモリッツ



開館時間：

10.00-13.00 16.00-19.00

火曜休館

団体割引あり (10名様より)

小人 (12歳未満) 無料

展示品：

画家の中心的作品 (油彩画)、スケッチ、パステル画、および画家の生活・仕事に関する記録写真

その他：

特別展、資料室、郷土史に関する記録

サービス：

ガイド、特別イベント、講演、学芸教育、助成事業、ショップ

詳しくはホームページをご覧ください：

www.berrymuseum.com

ペーター・ローベルト・ベリー(1864-1942)——保養処方医から画家へ

絵画は、ペーター・ローベルト・ベリーの生涯において、幼いときから重要な位置を占めていました。彼の父、ペーター・ベリー一世医学博士は、イギリス軍に勤務してクリミア戦争に参加したために《連隊の医師》とも呼ばれています。彼は才能あるアマチュアでした。その熱意と才能、そして精密な観察眼は、息子へと受け継がれました。しかし、ペーター・ローベルト・ベリーにとっては多くの理由から、まず医学を学ぶことが当然のことだったようです。サンモリッツの保養処方医としても彼は父を手本としました。彼の父は歴史の浅い保養地に、19世紀の末の三分の一にわたって、決定的な影響を与えていました。若いベリーは、アメリカ人の婚約者との破談によって引き起こされた深刻な人生の危機により、ようやく絵画の道を見出しました。定評があり《ファッションابل》でもあったサンモリッツの保養処方医は、隠遁の生活を送る画家へと転身しました。このことから明らかなのは、来賓や避暑客の世界と、観光地として知られた風景だけでないエンガディーンに根本的に取り組みたいという願望との間の葛藤です。彼の一番の手本としてはジョヴァンニ・セガンティーニの名が挙げられます。ベリーはセガンティーニを個人的に知っており、また賞賛していました。ベルゲルの画家、ジョヴァンニ・ジャコモッティのところでは、助言を乞い、また願い通りに絵を描くための支援を受けました。そしてついにベリーは医師という職業を完全に捨て、1900年から1906年の間、かつて彼以前にジャコモッティが、またシルス・マリア出身のアンドレア・ロッシがそうしていたように、ミュンヘンとパリの定評ある芸術学校に学びました。新世紀初めのこの数年間、ペーター・ローベルト・ベリーは活発に同時代の芸術界に関与しました。そうして彼は、フェルディナント・ホードラーと、ホードラーのエンガディーン滞在中に知り合いました。ベリーは自分の絵を、サンモリッツやクア、ツューリヒのスイス芸術展、そしてベルンで展示し、1914年にはヴェネツィアのビエンナーレに参加しました。

ペーター・ローベルト・ベリーは、自身をユリア峠とベルニーナ峠の画家と考えていました。エンガディーンの風景のなかでも特に素晴らしいこの場所と、彼のもっとも力に満ちた絵とは結びついています。彼の作品が現在でも力を失っていないのは、広い視界、輪郭の明快さ、そして光による雰囲気の高さを求める飽くなき探究心のたまものです。ベリーは山の絵を、かつてのセガンティーニのように、野外で描きました。大きな木箱がキャンパスを守り、板仕切りが申し訳程度に風を防ぎ、そして長靴やすね当て、マント、帽子で雪と寒さに対応しなければなりません。まさに、冬の絵で、ベリーはルンゼ「山腹を走る岩溝、ときに溪流となる」や亀裂、雪の吹きだまりのなかに、雪のもつ、信じられないほどの色彩の多様性を描きとどめています。セガンティーニの分割法から発展した彼の絵画の技法は、個々の絵の具の筋の密な編み目によって、まるで色鮮やかであるかのように見える、白のこの豊かさを照らし出しました。ペーター・ローベルト・ベリーは、全感覚をもってアルプスの風景の中へと身を投じたことによって、感覚的なものを生じさせ、また《絵のように美しい》ものの向こう側にある、ひとつの主観的な道を創造したのです。



雪のなかのアトリエ、ベルニーナ峠、1908年



「クリスマスの夕べ」、1899～1901年
キャンバスに油彩（108×159センチ）

絵を描くという願い

「去年の秋、秋の風景のあのすばらしい色のシンフォニーに魅かれて、抑えられない衝動のままに、何週間も色鉛筆とスケッチブックを持って山々をめぐり、スケッチをした。けれども、あまりにすぐ、気の滅入る経験をしなければならなかった。冷たくて固い色鉛筆には、私が絵で表そうとした感情を描き出す力がなかったのだ。

そこで私はパステルを手にとった。それをどうあつかうかはほとんど知らなかった。そうして生まれたスケッチは、ある程度は私の芸術的意図に添ってはいる。だが私を満足させてくれるものではない。

だから私はこの秋、職業上〈放免〉となったら、油絵の具の使い方を心底学びたい。そこで聞きたいのだが、君に、この心からの私の願いを満たすための時間が、またその気があるだろうか？」（P.R.ベリーのジョヴァンニ・ジャコメッティ宛ての手紙、1898年9月6日）

ジョヴァンニ・ジャコメッティが、ペーター・ローベルト・ベリーがこれほど切に願っていたとおりに油絵の具の取り扱いについて教えたということは伝えられていません。しかし返事の手紙で、ジャコメッティはこの友人を、将来絵画にいそむように勇気づけています。「すべきだと君が感じることをすべてをするんだ。すべてにしたがえば君は画家なんだ。絵の具が君を引き寄せて導いてくれる。衝動を抑えないでおいんだ。」そうしてペーター・ローベルト・ベリーは、自分の感情と願望にしたがいました。絵の具を取り扱うとき以外でも、ベリーは助言や手本を求めました。彼の初期の構図、たとえば田園を描いた鉛筆画が代表的に示していますが、これらは強く、ジョヴァンニ・セガンティーニからの影響を受けています。ベリーが1900年、パリのアカデミー・ジュリアンで絵画を学ぶことを決断するときになると、彼は自分自身のことを完全に芸術家と考えています。36歳だった彼はまた、その決断の影響がおよぶ範囲のことをおそらく意識しています。

アカデミー・ジュリアンはベリーにとってよい選択でした。この学校は1868年にロドルフ・ジュリアン(1839-1907)によってパリに設立され、フランスでもっとも評判の良い私立芸術学校のひとつとして一般に認められていました。この学校は公立学校エコル・デ・ボザールに対するもうひとつの可能性を形成し、また関心を寄せるすべての人に開かれていました。特筆すべきは女性たちです。エコルが女性にやっと1897年から門戸を開いたのに対し、こちらではそれ以前から、女性がプロとしての教育を受ける可能性がありました。生きているモデルのヌードデッサンがここでは教育の中心的部分を形成していました。そして果たせるかな、ベリーの描いたヌードは、彼が技術的に長けていたことを物語る証拠となっています。



ヌード習作、パリ、1900年
紙に木炭（48×62センチ）



日の入りごろの羊の群れ、1898年
紙に木炭（45×33センチ）